

英米文学から読む自然と人間 ()

鈴木元子

Nature and a Human Creature in English and American Literature

()

SUZUKI, Motoko

4. ワーズワースの「水仙」

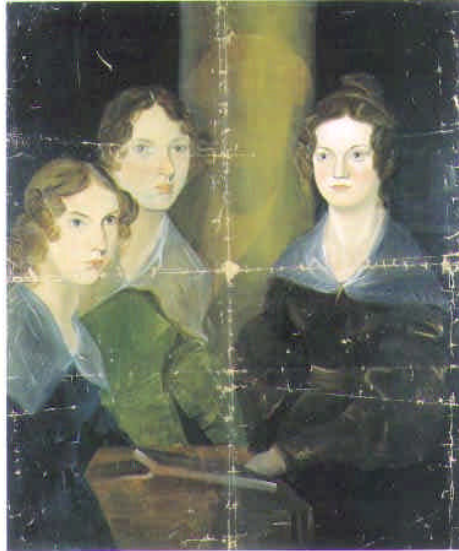
最初に、イギリスのロマン派詩人、William Wordsworth (1770-1850) の “The Daffodils” (1804) を取り上げますが、作品に入る前に少し周辺的な事柄について触れておきたいと思います。イングランドの北部に「湖水地方」(Lake District)¹というところがあります。ロンドンのユーストン (Euston) 駅から列車でオクسنホルム (Oxenholme) まで約 3 時間、そこから湖水線でウィンドミア (Windermere) まで約 20 分で行くことができます。湖水地方は、イングランド随一の自然美を誇る地方で、現在では英国人の避暑地として、また海外からの観光客が絶えないエリアとして有名です。日本人観光客も年々増加していて、昨秋筆者が訪ねた折にも毎日どこかで日本人観光客に遭遇しました。

湖水地方は房総半島ほどの広さで、「カンブリア地方」とも呼ばれ、国立公園に指定されています。この「カンブリア」が、紀元前 4500 年にまで溯ることのできる「カンブリア紀」という地層名の語源になっています。紀元前 4500 年頃は氷河時代で、この辺りの湖は全てこの時代に形成されたものだそうです。

これまでこの地方の自然はたいへん厳しく、温暖な南部に比べれば、ヒースの咲く不毛な地と考えられてきました。しかしこの地は、ワーズワースをはじめ多くの詩人を生み、さらには『ジェーン・エア』(Jane Eyre, 1847) を書き

¹ 「ここは『絵のような風景』という表現がぴったりくる。日本でいうなら、富士五湖と蓼科と軽井沢、それに裏磐梯の五色沼をひとまとめにしたようなところで、要するに景色のよい保養地である。」『地球の歩き方 26 イギリス』(ダイヤモンド社、1998 年) 275 ページ。

たシャーロット・ブロンテ（Charlotte Brontë, 1816-1855）や、キイツ（John Keats, 1795-1821）らロマン派の作家に大きな影響を与えました。



THE BRONTË SISTERS

Left to right: Ann, 1820-49; Emily, 1818-48; Charlotte, 1816-55

見渡せば至るところ羊の群れがのんびりと草を食み、またウサギがピョンと飛び跳ねて遊んでいます。たとえば、ビアトリクス・ポター（Beatrix Potter）の「ピーター・ラビット」（1901）たちは、彼女のイマジネーションの世界の住人というより、むしろ日常生活の一コマといっても良いほど自然が素朴で豊かなところなのです。100年近くたった今でも、イギリスでは小さい子どもたちに必ず読んで聞かせる絵本の一つだそうです。

イギリスが世界に誇る自然詩人ワーズワースも、この湖水地方に生まれ、過ごし、ここで生涯を閉じました。この地方の自然がなければ、彼の詩もなかったといっても決して過言ではないでしょう。

グラスミアの町から歩いて 10 分ほどのところにある彼のダブ・コテージ（Dove Cottage）を訪れました。1799年、この家にワーズワースと妹のドロシーが引っ越してくると、コウルリッジも彼らの後を追って、ここから 13 マイル離れたケズィックのグレタ・ホールに落ち着いたそうです。ワーズワースの生涯中、最も幸福な時期がここで暮らした数年間であったとされています。彼は

この簡素で頑丈な石造りの家で、1807年頃までに代表的傑作をほとんど創作しました。



The Tale of Jemima Puddle-Duck

From 'The Tale of Jemima Puddle-Duck' by BEATRIX POTTER

田部重治はワーズワースについてこう評しています。「彼は英国の生んだ最も偉大なる自然詩人であった。恐らくは自然のために自然を歌った唯一の詩人であったろう。多くの詩人は自然を生けるものとして歌っているが、彼ほど真にそれを信じていた詩人はないように思われる。そして彼の自然への愛は人間をも愛せしめた。何となれば、彼には人間は自然の一部であったから。」²

さらに、伝記的なことを付け加えるならば、ワーズワースは少年時代、自然の光景に見とれ、自然の音に聞き惚れ、山小屋の住人や羊飼いたちとも仲良くし、一人で散歩に出かけては自然の懐の中で何時間も過ごしたといえます。それが彼のイマジネーションを育て、詩人としての資質を大きく開花させる肥しになったことは確かです³。母親を8歳の時に、そして父親を13歳の時に亡くしたことを考え合わせると、彼の幼少期の寂しさは自然の温もりの中で償われていったといえるかもしれません。1787年にケンブリッジのセント・ジョーンズ・カレッジ (St. John's College) に入学しても、あまり興味を惹くような学

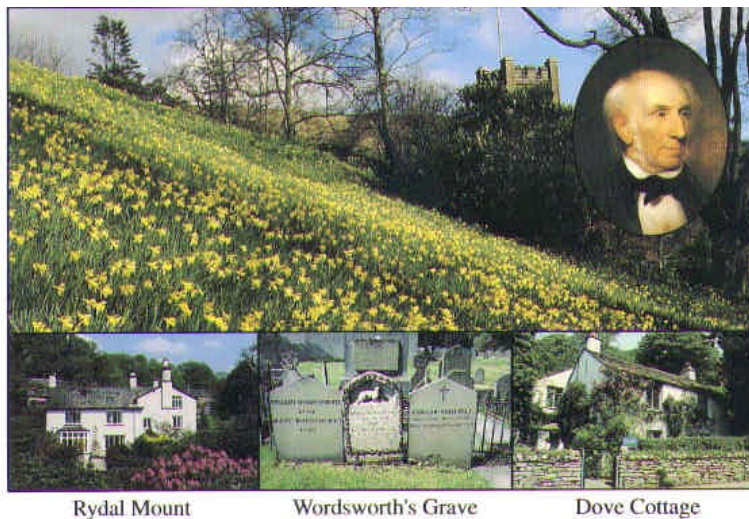
² 『ワーズワース詩集』田部重治選訳 (岩波書店、1938年、1976年) 216ページ。

³ *The Norton Anthology of English Literature*, 126.

科は見い出せなかったといいます。



View of gardens and Lake Windermere
from Wordsworth's attic study at Rydal Mount.



Portrait of William Wordsworth, Rydal Mount,
Wordsworth's Grave, and Dove Cottage.

ロマン派の詩人は、“epiphanic”の瞬間（本質の突然の知覚）というものを体験するといいます。これは別の言葉では、靈的覚醒といえるかもしれません。この「水仙」の詩においても、過去の体験が日常生活の中で突然想起され、詩人に靈的覚醒と喜びをもたらしました。

I wandered lonely as a cloud
That floats on high o'er vales and hills,
When all at once I saw a crowd,
A host, of golden daffodils;
Beside the lake, beneath the trees,
Fluttering and dancing in the breeze.

Continuous as the stars that shine
And twinkle on the milky way,
They stretched in never-ending line
Along the margin of a bay:
Ten thousand saw I at a glance,
Tossing their heads in sprightly dance.

The waves beside them danced; but they
Out-did the sparkling waves in glee:
A poet could not but be gay,
In such a jocund company:
I gazed--and gazed--but little thought
What wealth the show to me had brought:

For oft, when on my couch I lie
In vacant or in pensive mood,
They flash upon that inward eye
Which is the bliss of solitude;
And then my heart with pleasure fills,
And dances with the daffodils.

詩人が孤独に一人瞑想しながら、まるで雲が流れるようにフラフラと谷や丘を彷徨している時、突然眼の前に、黄金色のラッパ水仙が辺り一面に咲誇っているのを見かけます。湖岸の、木々の下で、そよ風に吹かれて踊っているのだ

す。そこで、陰気に心が打ち沈んでいた詩人もひとりで陽気にならざるを得ません。そうしている間、どれほど自然の豊けさが自分に注がれ、我が内に吸収されていったかなど全く気づきませんでした。ところが、しばらく時を経て、また物思いに沈んで長椅子に横になっていると、あの過去の情景が、あの水仙の群居しているさまが、詩人の胸の内に突然浮かび上がって来るではありませんか。その時、彼の心は再度あの時の感動と喜びに満たされ、水仙の花と共に踊り出すのでした。

ワーズワースは、過去の出来事を追想する時に詩が生まれると語っています。それを彼は、“emotion recollected in tranquillity”⁴と呼びました。

I have said that poetry is the spontaneous overflow of powerful feelings: it takes its origin from emotion recollected in tranquillity: the emotion is contemplated till by a species of reaction the tranquillity gradually disappears, and an emotion, kindred to that which was before the subject of contemplation, is gradually produced, and does itself actually exist in the mind.⁵

現存の事物が過去の若かりし頃の体験を想起させる時、感情の突然の刷新(“a sudden renewal of feelings”)が起こり、それが詩になって表出するというのです。物思いに耽りながら長椅子に横たわっている時にこそ、ラッパ水仙群のあの楽しげな様子が自然の命ともいふべきエネルギーを伴って、詩人の気分を高揚させて余りあるのです。

ワーズワース独特のそんな心境が美しく表現されているのが、「旅してワイ河畔を訊ねし時、ティンタン寺の数マイル上流にて作れる詩」(“Composed a Few Miles above Tintern Abbey, on Revisiting the Banks of the Wye during a Tour” July 13, 1798)です。ワーズワースがワイ河畔とティンタン僧院の廃虚を訪れたのは、1793年8月、一人で散歩をしている時でした。その時、彼はまだ23歳でしたが、その5年後に再訪する機会がありました。

その風景は、“inland” (l.4) や “Green to the very door” (l.17)の表現からも分かるように、単なる景色以上の物として、一枚の絵として彼の心の奥に大事に保管されていました。いつ、どんな場所に居ても、心の中に喜びを伴って再生される景色であったのです。

⁴ M. H. Abrams, General Editor, *The Norton Anthology of English Literature*, 6th edi., vol. 2 (New York: W. W. Norton & Company, 1962, 1993) 128.

⁵ William Wordsworth, *Preface to Lyrical Ballads, with Pastoral and Other Poems* (1802). (*The Norton Anthology of English Literature*, p. 151)

But oft, in lonely rooms, and 'mid the din
 Of towns and cities, I have owed to them
 In hours of weariness, sensations sweet,
 Felt in the blood, and felt along the heart;
 And passing even into my purer mind,
 With tranquil restoration: - feelings too
 Of unremembered pleasure: (l.25 - 31)

自然との接触が、あるいはその体験を想起することさえもが、一種の宗教的癒し、ヒーリングを得ることでありました。

「幸いなる気分」(“blessed mood” l.37, 41) が生じ、「心の絵姿が再び甦る」(“The picture of the mind revives again” l.61) 経験をしたからです。

While here I stand, not only with the sense
 Of present pleasure, but with pleasing thoughts
 That in this moment there is life and food
 For future years. (l.62 - 65)

年齢を重ねるにつれ、自分の心の中にある絵と実際の景色とがズレを生じてきても、詩人は過去の喜びを再体験することができ、また現在その喜びを味わうことも、未来に希望を抱くことさえできるのでした。

当時を振り返って詩人は、「自然はその頃われに取りては凡てなりき」(72 - 75 行) と詠っています。そして現在、粗暴な喜びを味わったり、楽しい本能的な振る舞いをするにはもうないけれども、しかしながら自然は崇高で、今でも自然を愛していると、自然に対し、一貫して忠誠を誓っています。

A lover of the meadows and the woods,
 And mountains; and of all that we behold
 From this green earth; of all the mighty world
 Of eye, and ear, --both what they half create,
 And what perceive; well pleased to recognise
 In nature and the language of the sense,
 The anchor of my purest thoughts, the nurse,
 The guide, the guardian of my heart, and soul
 Of all my moral being. (l. 103 - 111)

このようにワーズワースは自然こそ純粹なる思想の安住地と見なし、そこに心情の乳母、指導者、保護者、魂を見出そうとしています。

さらには、「ああ、いとおいしい、いとおいしい妹よ、自然を愛する者を、自然はかつて裏切ることはなかったと知り、わたしはこう祈る」(My dear, dear Sister! and this prayer I make,/ Knowing that Nature never did betray. l.121 - 2)と自然を人格化しています。また、「こんなに永い間、自然の崇拜者であったわたしが」(I, so long/ A worshipper of Nature, l.151 - 2)とあるように、ワーズワースは正真正銘、自然崇拜者でありました。自然は人間の精神を鼓舞し、人間の霊を清め、静隠と美の印を贈り、高遠なる思想を授け、満ち足りた気分浸らせてくれます。自然に属し、自然と一体感を保つことはなんと麗しいことでしょうか。ワーズワースにとって、自然は神と言い換えても可笑しくない、そんな信仰の対象でさえありました。

5 . コウルリッジの『老水夫行』

イギリス・ロマン派の詩人 Samuel Taylor Coleridge (1772 - 1834)の *The Rime of the Ancient Mariner* (1798) は、英文学史に The Romantic Revival を到来させた『抒情歌謡集』(*Lyrical Ballads*, 1798) の巻頭を飾る作品として発表されました。同じロマン派でありながら、ワーズワースの詩とは異なる、コウルリッジ独特の世界を、彼の迫真的想像力をもって現出させた名詩中の名詩であります。コウルリッジは詩人であるばかりか、『文学的伝記』やシェイクスピア論を残した一流の大批評家であり、また非凡な宗教思想家といえる文学者でした。彼はワーズワースより2年遅く生まれました。父親は田舎牧師でした。

この詩は超自然的かつ象徴的な物語詩です。詩の冒頭に、全宇宙には見える自然よりも見えない自然の方が多い、そして万物には必ず何がしかの霊的な意味がある、というトマス・バーネットの『哲学的考古学』を引用しています。

I readily believe that there are more invisible than visible Natures in the universe. But who will explain for us the family of all these beings, and the ranks and relations and distinguishing features and functions of each? What do they do? What places do they inhabit? The human mind has always sought the knowledge of these things, but never attained it. Meanwhile I do not deny that it is helpful sometimes to contemplate in the mind, as on a tablet, the image of a greater and better world, lest the intellect, habituated to the petty things of daily life, narrow itself and sink wholly into trivial thoughts.

But at the same time we must be watchful for the truth and keep a sense of proportion, so that we may distinguish the certain from the uncertain, day from night. (Adapted by Coleridge from Thomas Burnet, *Archaeologiae Philosophicae* <1692, p.68>)

コウルリッジもまた、宇宙・自然の中に見えない霊（精霊）が存することを想像しました。たとえば、*The Rime of the Ancient Mariner* の第 2 曲の終わりに、“ A Spirit had followed them; one of the invisible inhabitants of this planet, neither departed souls nor angels; ” と添え書きをしています。

この作品は⁶、老水夫が婚礼の祝宴に行く途中の若者を呼び止め、自分の体験談を聞かせるところから始まります。ある時、彼の乗った船が嵐のために南極に流され、氷に閉じ込められてしまいます。氷一面の世界、何一つ生き物のいない世界にあって、どこからともなく飛んできた一羽のアホウドリは船員たちに吉兆として迎えられます。ところが、その吉鳥を何の理由もなく、この老水夫は射落としてしまったのです。彼の行為には、自然の美しいものに対する人間の野蛮さや傲慢、征服欲があったことを認めないわけにはいきません。彼の罪に対する罰の印が彼の首に掛けられ、呪いを受けた船は北方に流れ、終には赤道に達します。船は止まり、彼以外の乗組員たちは全員渴いて死んでしまいます。一羽のアホウドリを殺害したことが、船員みんなの共同責任のように取り扱われます。すなわち自然に対する冒瀆や殺傷は、共同責任として人類の滅亡を生む可能性があることを示唆しているかのようです。しかし、そのような中であって老水夫自身は死ぬことも赦されず、生き地獄が続いていきます。彼は死中の生を生き、孤独なる生に苦しみつつ、月や星を羨み、呪いの中に身を沈めていきます。

すると、ある晩、アホウドリを殺した晩と同じ白い月明かりが辺りの世界を照らしている時、静まった海原に住む、ある被造物に眼が釘付けになってしまいます。それは、海蛇でした。

Beyond the shadow of the ship,
I watched the water-snakes:
They moved in tracks of shining white,
And when they reared, the elfish light
Fell off in hoary flakes.

⁶ 拙論「英米文学史にみるエコロジカルなモチーフ 人間と動物の共生」『静岡県立大学短期大学部研究紀要第 12 - 1 号』（1999 年）88 - 90 ページ 参照。

Within the shadow of the ship
 I watched their rich attire:
 Blue, glossy green, and velvet black,
 They coiled and swam; and every track
 Was a flash of golden fire. (l. 272 - 81)

この時、水夫はその海蛇の美しさにある種の感動を覚えます。自然の神秘的な美しさは、創造主の御手のわざ無くしては考えられないほどの、眩い荘厳さを有していました。水夫の心にはこの海蛇に対する純粋な愛情すら湧き上がり、この海の生き物を思わず祝福してしまうのです。

O happy living things! no tongue
 Their beauty might declare:
 A spring of love gushed from my heart,
 And I blessed them unaware!
 Sure my kind saint took pity on me,
 And I blessed them unaware.

The selfsame moment I could pray;
 And from my neck so free
 The Albatross fell off, and sank
 Like lead into the sea. (l. 282 - 91)

ここで水夫は単なる一生物に感嘆したのではなく、その背後に天地万物の造り主を垣間見、神に対する畏敬の念を禁じ得なかったのではないのでしょうか。彼はとうとう神に祈ることができました。すると、首にかかっていた罰の印であるアホウドリが、鉛のように海深く沈んでいったのです。

この後、無事に自分の村まで風に流されて行った老水夫は、自らの奇異な体験を語ることで、神の真理を人々に伝道するようになりました。その真理とは、次の通りです。

Farewell, farewell! but this I tell
 To thee, thou Wedding-Guest!
 He prayeth well, who loveth well
 Both man and bird and beast.

He prayeth best who loveth best
 All things both great and small;
 For the dear God who loveth us,
 He made and loveth all. (l. 610 - 7)

コウルリッジの *The Rime of the Ancient Mariner* は、ただ自然を賛えるだけに終わらず、自然についての永遠の真理を物語っているように読み取れます。たとえそれが、たった一人の犯したわざであっても、生き物を何の理由もなく殺傷する、その悪魔的なわざは人類全体に呪いとなって返ってくるということを教えてくれます。現代人が毒物や核の利用、公害や戦争・虐殺を行うならば、それは人間が人間の首を絞める行為として、その結果を自分や自分の子孫の身に招くこととなります。レイチェル・カーソンがその著書『沈黙の春』⁷の中で警告を発している通りです。結局、自然や生き物（人を含めて）を大切にし、地球を慈しみ愛していくことが、人類に幸福と平和をもたらす道であることを、この18世紀末の詩 *The Rime of the Ancient Mariner* が示唆しているようです。

6. ホーソーンの『緋文字』

Nathaniel Hawthorne (1804-1864)は、アメリカ、マサチューセッツ州の古い港町セイレムの由緒ある清教徒（ピューリタン）の家柄に生まれました。1630年代にイギリス本土から移住してきた初代はクウェーカー教徒を鞭打ちの刑に処し、2代目は魔女狩り裁判の時の判事でした。ホーソーンは、ピューリタンにまつわる罪の意識を己が罪意識として認識し、作品の舞台背景に据えていきました。

そこで、自然についての受容の仕方にしても、ロマン派詩人のように唯々、素晴らしいと感嘆しているばかりではありません。この時代になると、自然をピューリタン社会に対峙するものとして捉えるようになっていきます。自然は、社会の掟（法律）の対立項として、アウトロー、野蛮、野生、本性を表し、インディアンや野獣、魔女・悪魔のいる森というシンボルに代表されていきます。

彼の代表作品である *The Scarlet Letter* (1850)⁸の中の一節です。

The stigma gone, Hester heaved a long, deep sigh, in which the

⁷ Rachel Carson, *Silent Spring* (1962). レイチェル・カーソン『沈黙の春』青樹築一訳（新潮社、1974年、1998年）。

⁸ *The Scarlet Letter*, The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne Vol. I (Ohio: Ohio State University Press, 1962)

burden of shame and anguish departed from her spirit. O exquisite relief! She had not known the weight, until she felt the freedom!
(202)

恥辱の印(しるし)とは、ピューリタン社会の法(掟)に従って、ヘスターの胸に付けられたAのしるしでした。それを自分から投げ捨ててしまうと、恥や苦しみ of 重荷から解放されて、魂は安らぎや自由・解放を感じて軽くなるのでした。既婚者が行方不明でありながら、赤ん坊を出産したヘスターは、姦淫の罰を受けなければなりませんでした。しかし、彼女は自問自答します。実際の夫との結婚生活は冷たいもので、夫婦愛や夫婦のいたわり合いなどのないものでした。否、彼女は法的に結ばれた夫のことは、むしろ嫌っていたのでした。不倫相手のディムズデイルこそ、彼女が人生で初めて愛した男性であり、そこにこそ神聖な愛があると信じていました。本当に人間の心を理解してくれる神という存在がいるとしたら、神はそれを理解してくれたに違いありません。しかし、人間の社会を束ねる社会の法、また政教一致のピューリタン時代は、愛のない結婚を正当と認め、愛ある男女の関係を姦淫として罰したのでした。

By another impulse, she took off the formal cap that confined her hair; and down it fell upon her shoulders, dark and rich, with at once a shadow and a light in its abundance, and imparting the charm of softness to her features. There played around her mouth, and beamed out of her eyes, a radiant and tender smile, that seemed gushing from the very heart of womanhood. A crimson flush was glowing on her cheek, that had been long so pale. Her sex, her youth, and the whole richness of her beauty, came back from what men call the irrevocable past, and clustered themselves, with her maiden hope, and a happiness before unknown, within the magic circle of this hour. And, as if the gloom of the earth and sky had been but the effluence of these two mortal hearts, it vanished with their sorrow. (202)

ここに引用されている「堅苦しい帽子」とは、まさに社会の掟を象徴しています。それは生来ヘスターが持っている長いふさふさとした黒髪を覆い隠し、彼女の体内を流れている血液を遮断するものでした。そこで、帽子を脱ぐや否や、彼女の中に血液が通い出し、長い間青ざめていた頬に紅がさしたと描写されています。ヘスターに天来の女らしさ、美しさ、生气、若さという身体的恵みが甦ってくると、それに伴い精神的な恵みである希望や幸福というものも戻

ってきたように感じました。

All at once, as with a sudden smile of heaven, forth burst the sunshine, pouring a very flood into the obscure forest, gladdening each green leaf, transmuting the yellow fallen ones to gold, and gleaming adown the gray trunks of the solemn trees. The objects that had made a shadow hitherto, embodied the brightness now. The course of the little brook might be traced by its merry gleam afar into the wood's heart of mystery, which had become a mystery of joy.

Such was the sympathy of Nature - - that wild, heathen Nature of the forest, never subjugated by human law, nor illumined by higher truth - - with the bliss of these two spirits! (202 - 3)

この時、「自然もヘスターに共鳴した」と記述されているのを見逃すわけには行きません。ここで、森の自然は当時の人々の考え方を反映して、野生的で異端的との修飾語が付けられています。しかしながら、作家ホーソーンは、「人間の法律に決して隷属しない自然」と書いているのです。そして、「この自然は愛し合う男女のこの上ない喜びに共鳴した」とあるわけですから、何物にも束縛されない純粋な愛や、人間が自然に感じる気分の良さや喜びといった感情そのものが、決して悪いものではないことを明言しているのです。

. . . A wolf, it is said, - - but here the tale has surely lapsed into the improbable, - - came up, and smelt of Pearl's robe, and offered his savage head to be patted by her hand. The truth seems to be, however, that the mother - forest, and these wild things which it nourished, all recognized a kindred wildness in the human child. (204 - 5)

それは、作品の中で、姦通によって生まれた女の子パールに対する人々の態度の違いとしても表現されています。村の人たちは、大人も子どももパールを見ると、私生児、宗教教育を受けていない異端児（本当は母親から教理問答を習っているのだが）、気味の悪い存在などのレッテルを貼りますが、そのいじめの対象となっていたパールを、野生の森（母なる森）は自分たちと同類の存在として素直に受け入れるのです。

これらの描出から、自然が人間社会（ピューリタン社会）や宗教的教義、道徳に対峙するものとして位置づけられていることが明らかです。そして、作家ホ

ーゾーンはどちらの側に立っているかという点、どうも自然の側に立っている
と思えてなりません。

(続)

(2000 年 2 月 29 日 受理)